

## Post-Graduation Trends and Support Needs of Nursing Graduates

Kaori MAKI<sup>1)</sup>, Chizuko YOSHIKAWA<sup>2)</sup>, Haruka KAKEDA<sup>3)</sup>  
Rie FUJI<sup>1)</sup>, Ryoko SAKUMA<sup>1)</sup>, Hiroko KUKIHARA<sup>2)</sup>  
Kayoko KOGA<sup>1)</sup>, Michie BABA<sup>4)</sup>

- <sup>1)</sup> School of Nursing, Faculty of Medicine, Fukuoka University
- <sup>2)</sup> School of Nursing, International University of Welfare Fukuoka Faculty of Health Sciences
- <sup>3)</sup> School of Health Sciences, University of Occupational and Environmental Health
- <sup>4)</sup> School of Nursing, Faculty of Nursing, Reiwa Health Sciences University

### Abstract

This study aimed to clarify graduates' employment status and support needs. Two hundred and seventy nursing graduates (1st to 12th year) of the School of Nursing, Faculty of Medicine, Fukuoka University, who were working in a hospital affiliated with Fukuoka University, were surveyed using a questionnaire. The questionnaire consisted of seven items, including basic attributes, job-related difficulties, and expectations of the university in terms of post-graduation support. The number of respondents was 209 (77.4% response rate). Most of the respondents were female (204; 98.0%), and 40% had 5-10 years of nursing experience. Eighty-four (40%) had experienced a change of department. The most common difficulties experienced in the first year of nursing were "insufficient nursing skills," "inexperience in using medical equipment," and "insufficient self-learning," while many of the free descriptions were related to "multiple tasks and priorities" and "gap between training and field work." To overcome the problems, they consulted their supervisors, colleagues, friends, and others around them. Expectations of the university in terms of graduate support included "training in nursing topics," "career change counseling," and "mental support." In terms of support for graduates, the survey suggested the need for holding training sessions on nursing topics, a place to connect with faculty members, and the establishment of an alumni network that can provide and share information.

**Key words:** Nursing Students, Graduate Trend Survey, Post-graduation Support Needs

## 看護系大学の卒後支援のための卒後動向および支援ニーズの実態調査

牧 香里<sup>1)</sup> 吉川千鶴子<sup>2)</sup> 掛田 遥<sup>3)</sup>  
藤 理絵<sup>1)</sup> 佐久間良子<sup>1)</sup> 久木原博子<sup>2)</sup>  
古賀佳代子<sup>1)</sup> 馬場みちえ<sup>4)</sup>

- <sup>1)</sup> 福岡大学医学部看護学科
- <sup>2)</sup> 国際医療福祉大学福岡保健医療学部看護学科
- <sup>3)</sup> 産業医科大学産業保健学部看護学科
- <sup>4)</sup> 令和健康科学大学看護学部看護学科

要旨：福岡大学医学部看護学科の卒業生（1回生～12回生）のうち、福岡大学の関連病院に勤務している看護職者270名を対象に、卒後の就業実態や支援ニーズを明らかにすることを目的に質問紙調査を行った。調査内容は、基本属性や職務上の困難、卒業後支援として大学に期待すること等の7項目である。回答

数は209名(回収率77.4%)であった。性別は女性が204名(98%)、看護師経験年数は5-10年が最も多く40%であった。年齢別構成25-29歳が42%であり、35歳以上は1%以下であった。84名(40%)が部署の異動を経験していた。看護師1年目で経験した困難な事柄は「看護技術不足」「医療機器使用未経験」「自己の学習不足」が多く、自由記載には「多重課題・優先順位」「実習と現場のギャップ」に関する記載が多かった。克服の仕方としては、上司や同僚、友人などの周囲の人に相談していた。卒業支援として大学に期待することは「看護トピックスの研修」「転職相談」「メンタルサポート」などであった。卒業生の支援としては、看護トピックスの研修会開催、教員とのつながりの場、情報提供や情報共有ができる卒業生ネットワークの構築の必要性が示唆された。

キーワード：看護大学生、卒業生動向調査、卒後支援ニーズ

## はじめに

福岡大学医学部看護学科(以下、本学科)は2007年(平成19年)に4年制の看護学科として設置され、これまでに12回の卒業生(約1,200名)を輩出している。本学科の卒業生は、福岡大学の関連病院をはじめとする医療機関の看護師として就職するものが半数近くを占め、その他は九州圏内や関東圏、関西圏の医療機関に就職する。卒業生の10%程度が、保健師や養護教諭として就職したり、助産師課程へ進学する。これまで本学科としては、卒業時に就職予定施設・機関の把握は行っているが、卒業後の動向は調査を行っていないため、把握できていない現状がある。

専門職を教育する教育機関の役割は、卒業生を社会に送り出すまでで完結するものではない。卒業生の職場での活動状況や卒業生の要望・期待を把握し、人材育成の仕組みを見直し、良い人材を社会に送り出せるような<sup>1)</sup>支援体制が必要である。支援体制は、教育機関だけでなく、医療機関での現任教育と連携・協働して取り組むことが望ましい。そこで卒業生への支援体制構築の基礎資料を得る目的で、本学科の半数近くが就職する福岡大学の関連病院の協力を得て、卒業生の中で、在職者を対象として、卒後の就業実態や支援ニーズ調査を行った。調査を行うことで、看護基礎教育における卒後支援で取り組むべき課題が見出せると考える。本調査の目的は、卒後の就業実態や支援ニーズを明らかにすることである。今後、本調査結果を踏まえて、卒業支援体制整備に向けて取り組みたい。さらに、医療機関での現任教育と連携・協働するための方策を見出す一助にしたい。

## 研究方法

### 1. 調査対象者

福岡大学医学部看護学科の卒業生(1期生～12期生)のうち、2022年9月時点で福岡大学の関連病院に勤務

している看護職者270名。

### 2. 調査方法および調査内容

本調査の目的を各病院の看護部に説明し、質問紙調査用紙は看護部を通して配布した。各病棟内で回収箱へ提出し病棟師長が回収した。

調査内容は、1)基本属性、2)資格、3)最初の勤務部署や異動の有無、4)職務上の困難について、5)職務上の役割、6)就職前に学習が必要だった科目、7)卒業後支援として大学に期待することや希望の7項目である。

### 3. 調査期間

2022年8月～9月

### 4. 分析方法

選択式の質問項目は単純集計した。自由記載は類似した意味内容のものをまとめてカテゴリー化した。

### 5. 倫理的配慮

調査用紙は無記名で個人が特定されないようにした。対象者には、調査の趣旨・目的・意義を説明し、協力は任意であること、調査拒否により不利益を受けないこと、プライバシーの保護について文書による説明をし、調査用紙の同意確認欄へのチェックと提出をもって協力の意思を確認した。

## 結 果

本学科卒業生のうちに福岡大学の関連病院に勤務している看護職者270名に調査用紙を配布し、209名から回答が得られた(回収率77.4%)。

### 1. 基本属性

性別は、女性204名(98%)、男性5名(2%)であった。看護師経験年数(図1)は、5-10年未満が最も多く40%、5年以上の勤務者の合計が58%であった。年齢

別構成（図2）は、25-29歳が42%であり、35歳以上は1%以下であった。

看護師以外の資格免許は、保健師84名、助産師4名、養護教諭13名であった。84名（40%）が部署の異動を経験していた。

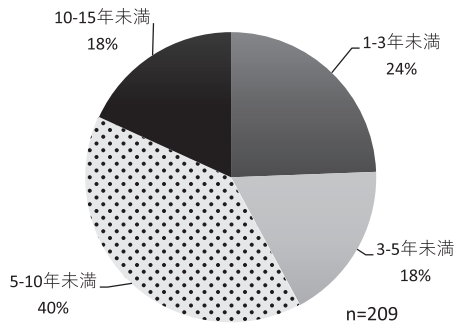


図1 看護師経験年数

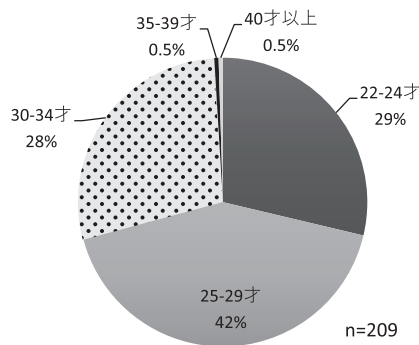


図2 年齢別構成

## 2. 看護師1年目で経験した困難な事柄

看護師1年目で経験した困難な事柄（複数回答可）については図3の通りで、内容としては多い順に「看護技術不足」149件、「医療機器使用未経験」137件、「自己の学習不足」115件であった。「医療者とのコミュニケーション」「職場での人間関係」にも困難を感じていた。困難を強く感じた事柄（場面）の自由記載のカテゴリーを表1に示す。

## 3. 困難な事柄の克服方法

困難な事柄の克服の仕方（図4）としては、「同僚に相談」179件、「上司や同僚に相談」107件、「友人に相談」89件と周囲の人に相談していた。「大学の先生への相談」は5件と少ない。また、「自己学習」を行って自分で解決する努力を行っていた。「ストレス発散方法」を見出すことで対処しているが、「耐えた」62件、「まだ克服できていない」11件と自分だけでは克服できていない状況がみられた。

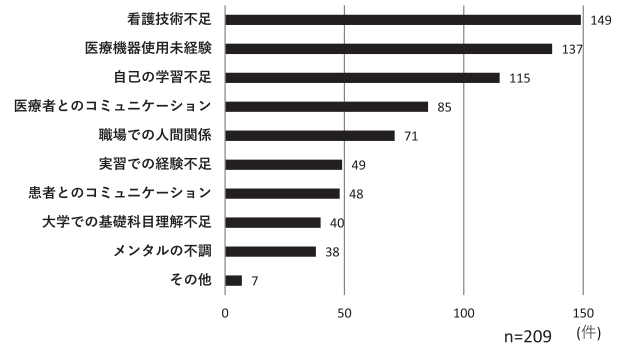


図3 看護師1年目で経験した困難な事柄

表1 困難を強く感じた事柄・場面（自由記載）

カテゴリ名	数	%
多重課題・優先順位（スケジュール管理含む）	32	22.1
実習と現場のギャップ	19	13.1
主に上司との関係構築・医療従事者間の人間関係	13	9.0
不慣れた看護技術・処置介助の実践、手技の確立	13	9.0
上司へ相談したり意見を言いづらい	12	8.3
専門分野の知識不足	11	7.6
多職種・他部署スタッフとの連携	10	6.9
業務内容・業務量の多さ	10	6.9
アセスメント力不足	9	6.2
医療機器の使用	8	5.5
コミュニケーション能力	8	5.5
日々の緊張感や不安	8	5.5
学習時間の確保のしづらさ	7	4.8
報連相について	6	4.1
看護専門技術の知識不足	6	4.1
急変時の対応	6	4.1
上司からの一方的な指導	6	4.1
患者・家族との関わり方	5	3.4
病態の理解不足	5	3.4
複数患者の看護	3	2.1
終末期の患者との関わり	3	2.1
同期と比較して焦ること	3	2.1
出来ないことが多い	2	1.4
薬剤の知識	2	1.4
残業	2	1.4
研修・課題が多い	2	1.4
その他	28	19.3

## 4. 卒業支援として大学に期待すること

卒業支援として大学に期待すること（図5）は、「看護トピックスの研修」、「転職相談」、「メンタルサポート」が60件以上であった。「研究支援」は17件で最も少なかった。卒業後支援の希望の内容に関する自由記載のカテゴリーを表2に示す。

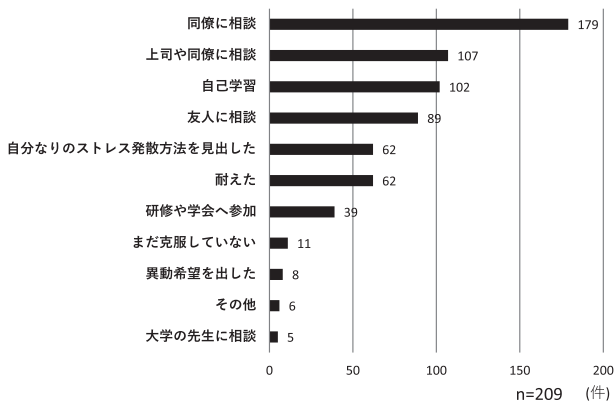


図4 困難な事柄の克服方法

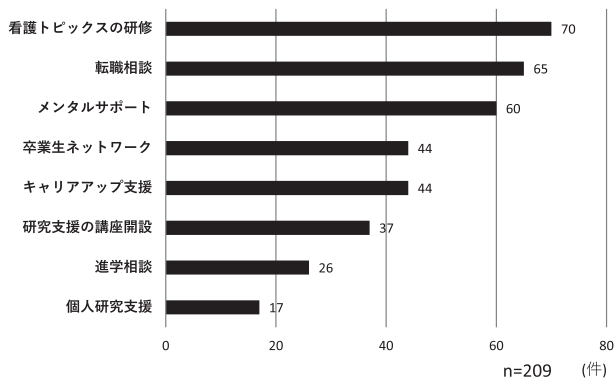


図5 卒後支援として大学に期待すること

表2 卒後支援の希望の内容 (自由記述)

カテゴリ名	数	%
メンタルサポート	6	20.0
技術練習の場	4	13.3
相談窓口	4	13.3
転職相談	4	13.3
研修・学習の機会	3	10.0
キャリア相談 (キャリア設計、進学含む)	3	10.0
卒業生同士・教員との交流の場	3	10.0
1・2年目の支援	2	6.7
部署別の特徴の説明 (在学中)	1	3.3

考 察

1. 卒後の動向把握

年齢別構成では、20代が約70%でありその中でも20代後半が最も多く、回答者の半数以上が5年以上の経験を積むことができていることが分かった。

卒後1年目での困難な事柄では、「看護技術不足」「医療機器使用未経験」の回答が多く、日比野ら<sup>2)</sup>の研究結果においても「看護技術が未熟であること」「医療機器装着が未経験」が多く挙がっており、限られた実習時間の中での経験不足によって、様々な場面で困難を経験していた。しかし、困難な事柄を克服する方法の結果より、

同僚や友人、上司に相談し困難を克服しようとしている様子が伺えた。一方で、「耐えた」と回答している者もあり、大卒看護師の特徴の一つには周囲に支援を求められない傾向があること<sup>3)</sup>が指摘されている。また、就職3か月目の新人看護師への調査では、「同じことを質問できない」という結果も出ており<sup>4)</sup>、本学の卒業生も同じような傾向があることが考えられる。「耐える」ことが常態化すれば、精神面への負の影響となり、休職や離職につながる可能性も考えられる。医療機関における離職率の問題は未だに解決せずに残されている。教育機関と、医療機関が連携・協働して、情報共有し、先輩看護師や上司の受け止めと支援に繋げられるような体制整備が必要である。また、香川ら<sup>5)</sup>が述べているように、自身でセルフマネジメントする方法の習得や支援リソースを知っておくことなど、広く周知しサポートする機会が必要である。卒後支援の希望の上位にメンタルサポートが挙がっている。教育機関としても、メンタルサポートの体制整備は喫緊の課題であると考えられる。

困難を強く感じた事柄・場面(自由記載)で最も多い「多重課題・優先順位」については、これまでも多く報告されており<sup>6),7)</sup>、2011年に厚生労働省より「新人看護師の臨床実践の向上に関する検討会報告書」<sup>8)</sup>が出され、各医療施設においてその対応が進められているところであるが、知識や経験不足の中で複数の患者を受け持ち、限られた時間の中で対応していくことに困難を感じている状況が持続している現状であった。

2. 卒後の支援ニーズと卒業生への支援

卒業支援として大学に期待することは先に述べたように、「看護トピックスの研修」、「転職相談」、「メンタルサポート」であった。卒業した大学に対して新しい情報の発信を求め、社会や医療現場の動きに敏感で前向きであることがわかった。どのような内容を求めているかについては調査していないが、今後は臨床と協同してニーズに応じた内容の研修の機会を提供する必要がある。

転職については、職場での相談はしづらいことが考えられ、学生時代に相談に応じてもらった教員に相談をしたいことや転職時の情報を必要としていることが把握できた。今回の調査対象は転職の経験がある者は含まれていないが、卒業生の多くが女性であることから今後ライフスタイルに応じた職場の変更や働き方を考える可能性がある。卒業した大学で条件にあった職場の情報が得られることは卒業生にとってメリットが大きいと考えられるため、卒業後に勤務する職場あるいは進学先と大学とのアクセスが容易にできるような環境作りを考える必要がある。また「卒業生ネットワーク」への期待も高いため、卒業生同志がつながりを持つことで転職の情報提供やキャリアアップの情報共有等も可能となるような窓口

の設置が望まれる。

前述したように、今回、メンタルサポートに対する要望が高いことが明らかになった。卒後1年目の困難な状況乗り越えるためには、サポートが必要である。先輩看護師や上司の支援のみならず、卒業後も大学の教員との関わりを継続し支援することが、看護師のメンタルヘルス支援として効果的であるかを検証していく必要がある。また、「多重課題・優先順位」への対応は看護基礎教育の中では経験しにくく看護基礎教育だけで力を培うには限界もあると言われている<sup>4)</sup>が、実習中の臨床判断能力の向上や大学と臨床が協同したシミュレーション教育に関わることを通して、困難な状況への解決につなげることができればよいと考える。

本調査によって本学の卒業生から貴重な回答を得ることができた。卒業生の動向を調査することは教育への評価にも繋がり今後の看護系大学の教育の充実をめざすために必須であり<sup>2)</sup>、大学が受ける第三者評価を視野に入れて動いている大学もある<sup>5)</sup>ことから、調査結果を在学生の教育へ活かしていくようなシステムづくりが必要である。

#### 研究の限界と課題

本調査は、卒業生が就職した2施設の職員に調査した結果であり、本学卒業生全体の意見が反映されているとは言えない。しかし、今回の調査の回収率は高く(77.4%)卒業生の実態がかなり明らかにされたと考える。また、今回の調査において卒後の大学への支援ニーズを把握することはできたが、卒後に大学の教員へ相談できている人は少ないという現状であったため、今後継続的に調査を行い、その理由を把握することや卒業生全体の動向についても調査していく必要がある。

#### 結 論

福岡大学の関連病院に勤務している卒業生209名の調査結果から

1. 卒後の就業実態は、卒後5～10年未満の勤務者が40%で最も多く半数以上(58%)が卒後5年以上就業していた。
2. 看護師1年目で経験した困難な事柄(複数回答可)については「看護技術不足」「医療機器使用未経験」「自己の学習不足」の回答が多く、自由記載には「多重課題・優先順位」「実習と現場のギャップ」に関する記載が多かった。克服の仕方としては、「上司や同僚に相談」「同僚に相談」「友人に相談」の件数が多く、周囲に人に相談していた。
3. 卒業支援として大学に期待することは「看護トピックスの研修」、「転職相談」、「メンタルサポート」

であった。

4. 卒業生の支援としては、看護トピックスの研修会開催、教員とのつながりの場、情報提供や情報共有ができる卒業生ネットワークの構築の必要性が示唆された。

#### 謝 辞

本調査にご協力いただきました卒業生の皆様、そして福岡大学関連病院看護部の皆様に厚く御礼申し上げます。

#### 文 献

- 1) 塩澤百合子, 板垣昭代, 野尻由香: A大学看護学部卒業生の動向調査—就業状況を中心に—. 獨協医科大学看護学部紀要 13: 73-86, 2019.
- 2) 日比野直子, 野呂千鶴子, 山路由実子: 看護大学における卒業生サポートネットワークの構築をめざした卒後動向の把握および支援ニーズに関する研究. 保健師ジャーナル 65(8): 676-682, 2009.
- 3) 酒井郁子, 湯浅美千代, 佐藤まゆみ, 大宝律子, 佐藤禮子: 看護系大卒者の特徴と育成・活用に関する看護師長の認識. 看護管理 13(7): 512-522, 2003.
- 4) 西田朋子: 就職3カ月の看護師が体験する困難と必要とする支援. 日本赤十字看護大学紀要 20: 21-31, 2006.
- 5) 香川由美子, 福田正道, 坪井茉莉, 廣川空美: 看護学教育における大学卒業段階での到達状況と卒業後の動向の把握—大学教育へのフィードバックシステムの基盤構築に向けて—. 梅花女子大学看護保健学部紀要 13: 1-9, 2023.
- 6) 田口智恵美, 坂本明子, 大内美穂子, 内海恵美, 三枝香代子, 浅井美千代: 本学卒業生が新人看護師となって職場で直面した困難. 千葉県立保健医療大学紀要 13(1): 29-38, 2022.
- 7) 今井多樹子, 岡田麻里, 高瀬美由紀: 新人看護師が複数患者を同時に受け持つ体制下で直面する多重課題対応不全を生み出す主要因子: KJ法を活用した看護管理者の面接内容の構造化から. 日本看護研究学会雑誌 44(2): 195-202, 2021.
- 8) 厚生労働省. 新人看護職員の臨床実践の向上に関する検討会報告書. 2011.

(令和5. 10. 10受付, 令和5. 11. 6受理)

「本論文内容に関する開示すべき著者の利益相反状態: なし」

